

子どもが自然の中で遊ぶことの教育的意味

龍谷大学短期大学部こども教育学科・教授 里山学研究センター・研究員
田岡由美子

1. はじめに

本稿は、瀬田キャンパスで開講されている「里山学」で実施した授業内容を活動報告としてまとめたものである。授業のタイトルは、「里山での児童・幼児教育—子どもの自然体験の教育的意味」で、2021年5月24日（月）3講にオンラインで実施した。

授業の目的は、子どもが自然の中で遊ぶことによって何が育つかについてあきらかにすることである。具体的には、子どもは自然と関わる中でどのような体験をしているのか、そのことを通して、どのような育ちが見られるかといった自然体験の教育的意味を、学生が自身の子ども時代を振り返りながら考察する。ここでいう「自然」とは、里山に限らず、庭、公園、原っぱ、野山、田畑、森、池、川、海、空などの身近にある自然や、動植物、雪や雨といった自然現象、さらには月や星といった天体なども含んでいる。

近年、子どもが自然の中で遊ぶこと、自然の中での活動を基軸とした保育・教育・子育てが国内外の各地で盛んに奨励されており、「森のようちえん」(Forest kindergarten、Wald kindergarten)、「里山教育」と称される活動（里山に出かけて遊ぶ、庭や畑仕事をするなど）を行っている幼稚園、保育所（園）、こども園が多々ある。ドイツやイギリスでは、園庭に草木を植えて自由に遊ぶ場所を確保したり、花や野菜の栽培をしたり、戸外にままごとセットを置いて（Mud Kitchen）泥や水や石をふんだんに用いて遊べるスペースを設けたり、園庭が狭い場合でも近隣の野外活動センターやあるいは森に週に何回か出かけて保育・教育を行ない、子どもの自然体験を取り入れている。筆者も2015年にサバティカルで1年間イギリスに滞在した際に、ロンドン、エディンバラなどの各地で自然体験を取り入れた幼稚園や保育所（園）を数多く視察した。また日本では大正期に、子どもの健康づくりや近隣の自然が失われて子どもの自然体験が減少していくことへの懸念から、バスで子どもを神社や森に連れ出し、自然に触れる直接体験を重視した保育・教育が展開されてきた歴史的経緯もある。

さらに歴史を遡ってみると、公教育が整い始めた200年以上前にルソーが人間の内なる自然（本性）に即して教育するために、著書『エミール』（1762）で子どもを野山に連れ出し実物を見せることの重要性を指摘している。また幼稚園の創始者であるドイツの教育学者フレーベルも子どもが小動物や植物の世話をすることや野山を歩き回る活動を推奨していた。この背景には、産業革命による社会の変化や、机上の学びにおける空虚な言葉のやりとりや聖書の暗記に終始する当時の学校のありようを批判し、実感をともなう子どもの主体的な学びに変えようとする彼らの強い思いがある。

本授業では、保育・教育の原点に戻って「幼児教育の祖」と呼ばれるフレーベルの教育思想に即して、子どもが自然と関わる体験の中にどのような育ちが見られるのか、あらためてその教育的意味を考察した。

2. なぜ、フレーベルなのかーエコロジカルな世界観

フリードリッヒ・フレーベル (F.Fröbel, 1782~1852) は、ドイツの教育学者・実践家であり、世界で初めて「幼稚園」(原語はKindergarten: 子どもたちの庭という意味を持つ) を創設した人物として有名である。フレーベルの命名からも明らかなように、彼は子どもと自然との関わりを重視した。彼の思想や実践は明治期にアメリカ経由で日本に輸入され、明治9年(1876)に東京女子師範学校附属幼稚園が誕生して以来今に至るまで、フレーベルの教育思想や方法は現在の日本の乳幼児保育・教育の根幹をなしているといっても過言ではない。

なぜ、本授業においてとりわけフレーベルを基軸にするのか。それは、①フレーベルが子どもの自発性・主体性を重視したこと、②子どもの遊びに高い価値を置いたこと、③自然の中での遊び(散歩や庭仕事)を奨励したこと、この3点にある。さらに特筆すべき点は、彼の教育思想が「万有内在神論」(panentheism) という独自の形而上学的世界観に支えられていることである。

フレーベルによると、この世のすべての生きとし生けるものは現象的には多種多様であっても、それぞれの内には同じ「神的なるもの」(das Göttliche) を宿している。その意味で万有は神的生による統一的連関をなしており、一見バラバラに見える事象はつながり合ってひとつの統一的な、調和的な世界を成している。神的生とは、神が次から次へと生あるものを生み成す根源的な生であり、創造性、あるいは生成を繰り返す力の源といってもよい。鉱物は鉱物なりに、植物は植物なりに、動物は動物なりに、各々に内在する神的生を、それぞれの立場・やり方で外に顕現することが万有の持つ使命であるとフレーベルは説く。植物が種から芽を出し、茎が伸びて葉を茂らせ花が咲くのも、植物に内在する神的生の顕れなのである。人間も例外ではない。無自覚にそれぞれの生を生きている他の被造物と異なり、意識的存在である人間は神性を十分に自覚し、外に表現し発展させることが人間に課せられた使命となり、その援助が教育であると彼は考えた。

フレーベルの世界観は、鉱物、動植物、人間という万有が神から生まれ出て、究極的には神との合一 (Lebenseinigung) を目指してそれぞれの生を展開しつつ、相互に共振し、響き渡る生の一大シンフォニーともいえるべき調和的な世界観であった。これは現代の我々にとって時代遅れの世界観に聞こえるかもしれない。しかしあらゆる生のつながりというネットワークの視点でとらえ直すと、彼の形而上学的な世界観は、現代風に言えば、人間が自然や環境と調和したエコロジカルな世界観と捉え直すことができるのではなかろうか。鉱物学を学び自然科学者でもあったフレーベルにとって、自然を対象化して合理的・科学的に理解することも確かに重要であったが、それ以上に自然も人間も「部分的全体」(das Gliedganzes) として、相互に個としては完全でありつつ統一的連関の一部分を成すことを感得することこそ、彼が自然の中での子どもの遊びに求めていた究極的な目標であった。本授業はこのことを念頭に置いて組み立てられている。

3. 子どもの遊び

「子どもの遊びは真剣で、深い意味を持ち、そして子どもの発達の最高の段階である」と述べるフレーベルにとって、遊びは決して暇つぶしや娯楽ではなく、子どもの内面的なものが自由な活動として外に顕れたものであり、幼児期の最高の営みであった。そもそも彼は、人間の本质は乳児の段階の活動衝動や作業衝動の中にあり、遊びこそ乳幼児期の創造的な活動衝動、作業衝動が触発される機会だと考えて遊びに高い価値を置き、さまざまな遊びを実践に取り入れた。たとえば、「恩物」(Gabe) とよばれる積み木を考案し、歌と手遊び、詩と絵が一緒になった『母の歌と愛撫の歌』という遊び歌集を出版し、自然の中での散歩や庭仕事を奨励し、身体運動を伴う歌や輪になる遊びを行なう子どもの遊び祭りを各地で開催した。

子どもは自らの興味・関心に基づき、心と体を動かして対象物や事象、環境と一体となって遊ぶ。そして結果としてさまざまな力を獲得していく。これは、ある効果を狙って集中的にトレーニングに励み、特定の力を伸ばすような活動とは全く異なる。その意味で遊びは全体的・総合的な活動と言えよう。遊びを通して子どもが種々の能力・態度や技術の獲得や既知の世界の拡大を可能していくことはもちろん大切であるが、フレーベルにとって究極的には、姿・形は異なるけれどもあらゆるものの生がつながっており、自分も大きな生の連関の一部分であるという感覚・感情を得ることが何より重要であり、これがエコロジカルな世界観の育成の土台となる。その意味で子どもが自然の中で遊ぶことは、子どもの十全な育ちにとって必須の活動なのである。

4. 生とつながる知

もちろん子どもの成長とともに対象が持つ意味は分化され、言語化され、記号化されて、知識は拡大・蓄積されていく。けれどもフレーベルが大切にしたい知とは、生の躍動感や生き生きしさと結びついた知である。これは、生物学者であるレイチェル・カーソンが「知ることは感じることの半分も重要ではないのです」と述べ、自然体験における神秘さや不思議さに目を見る感性 (Sense of Wonder) の獲得の重要性を説いたことと重なる。散歩や自然の中の遊びを通して、子どもは出会った動植物の名前を覚え、かかわり合いの中でその性質や特徴を知り、未知の世界を既知にし、自己の理解できる世界を拡大させ自然の法則を知っていく。このように子どもは自然体験においてさまざまな対象物や事象、環境との出会い、それらに主体的・応答的に関わることを通していろいろな感覚・感情を感得し、多様な知識や能力を伸ばしていくことができる。フレーベルが大切にしたい知とは、生の躍動感や不思議さ、驚き、生き生きしさ等々、生そのものと結びついた知であった。

5. 自然の中での遊びを通した発達段階ごとの子どもの育ち

次に、人間と自然との関係や子どもの遊びの重要性を踏まえ、子どもの発達に即した自然の中での遊びを具体的に取り上げて、そこで子どもが何を体験しそれが子どもの育ちにとってどのような意味を持つのか考察した。以下に授業の内容についてキーワードで示す。

(1) 幼児期の体験：家の周りの散歩・遊び

- 鉱物、動植物 (石、虫、花、鳥など) との出会いとかかわり
 - ・ 石や葉っぱ集め、虫採り、花摘み

- 収集の喜び、不思議さ、動植物への親しみ、一体感の感得。
- 季節の移り変わりを知る。
- 自然物を使った製作
 - 美的感覚、手先の巧緻性を養う、対象物の性質や特徴を知る。
- 砂、土、水、風、月、星とのかかわり
 - 雨の中を歩く、水たまりでバシャバシャ音をたてる、泥遊び
 - 跳ね返る水の感触を楽しむ、音を楽しむ、心身の解放感を味わう。
 - かざぐるまで遊ぶ
 - 目には見えないけれど、作用する風の力を感じる。
 - 月、星を見る
 - 不思議さや美しさを感じる、よく観る。
- (2) 幼児期の体験：よく観る、成ってみる、わがことのように感じる
 - 身近な生き物の飼育、植物・野菜の栽培（参照：図1）
 - 注意深く観る（観察）
 - 観察力、集中力の育成。
 - 生の共有、共感
 - 花が咲くと嬉しい、枯れると悲しいなど花の様子をわがことのように感得する。
 - 生の多様性を知る
 - さまざまな動物や植物と出会い、さまざまな生の姿やその特徴を知る
 - 既知の世界が広がる。
 - 生のサイクル（時間経過にともなう変容）を感じとる
 - 「種→双葉→花→枯れる→種」成長のプロセスを知る。
 - 収穫して食す
 - 喜びや感謝の気持ちを味わう。
 - 花や葉、木の実、砂などの自然物を使つての製作（参照：図2）
 - 色・形・数への興味・関心を持つ。
 - 規則性・秩序性への気づき。
 - 美的感覚・感性の育成。
 - 創造力、想像力、構成力の育成。
 - 手や指の巧緻性を養う。
 - 友達との交流、協力することによって、信頼感や社会性やコミュニケーション力を獲得する。
- (3) 児童期の体験
 - 秘密基地づくり（参照：図3）
 - 共同で製作する、製作物を使つてのごっこ遊び（参照：図4）
 - 身のこなしの充実、器用さを獲得する。
 - 想像力、創造力、観察力を養う。
 - 試行錯誤・創意工夫をする態度を養う。
 - 材料の性質や特徴を理解して、上手に扱う能力を獲得する。

- 仲間との交流、協力、団結する力の獲得、その喜び、充実感を味わう。
- 出来上がるまで決してあきらめず辛抱する力やレジリエンス、忍耐力の涵養。
- 自分自身の居場所の構築、安心感の獲得。

(4) 児童・生徒の体験

■野山を歩き回る、木登り、傾斜を滑り降りるなどの冒険・挑戦（参照：図5）

- 体力、筋力、脚力等の増強、身体の巧緻性の育成。
- 観察力を養う、全体を見渡して新しい世界を発見する。
- 精神や気分の高揚、解放感を味わう。
- 冒険心（ワクワク・ドキドキ感）を味わい、楽しむ、挑戦する勇気を持つ。
- やり遂げたという達成感や喜びを味わう、失敗すると挫折感を味わう。
- 創意工夫、試行錯誤、失敗を恐れずあきらめずに何度でも挑戦する力。
仲間との励まし合い。
- 危機・危険の察知と臨機応変な対応ができるような経験を積む。

■遠足・徒歩旅行・登山等（参照：図6）

■生物・社会・地理の授業

- 動物や植物とその生息場所に関する知識の獲得。
- 自然と共に住んでいる自分の地域のことを知り、既知の世界の拡大。
- 訪れた場所の歴史や文化、生活を知り、他者への思いを馳せる。
- 地形や方角空間的な位置関係を知る。
- 測量、製図の技術の獲得。
- 高いところから全体を見渡すことによって、自分たちが住まう地域がパノラマのように見える。そのことを通して、動植物、建物、川や山、田畑などあらゆるものが1枚の風景画のように調和的に収まっている様子を感じ取る。その一角を自分が占めている喜びを感じ、同時に自分の役割・責任を自覚する。

このように、乳幼児、児童、生徒は、自然体験を通してさまざまな力やものの見方を獲得することができることを確認した。

6. 自然体験の教育的活用

現在子どもの自然体験は、ヨーロッパを中心に、①アクティブ・ラーニングの一つとして、②環境教育として実施されている。

(1) アクティブ・ラーニングとして

子どもが自発的・主体的に問題を発見し、直接体験活動を通して仲間と協力して学びを深めることができるよう、授業の一環として自然体験を取り入れている。

(2) 環境教育として——人と自然の共存

スウェーデンでは学校教育とは別の形で「森のムッレ教室」を開催している。これは、地域

の子どもたちが幼少期から森に入って遊びながら、ムッレという架空の森の妖精を設定して、①森の中で守らなければならないルールやエコロジーの法則を教えてもらう、②森の中で歌やゲームを楽しみながら、五感を活用して自然を体験する活動である。

ムッレ教室では、子どもの発達段階ごとに、①自然の中で安心して快適に過ごせる、②自然を見て観察する、③全体のつながりの関係を理解する、④人間がどう自然に影響を与えているかを知る、⑤行動して社会に貢献する、といったプログラムが設定されている。(参照：図7)

以上の講義後、スイスの「森のようちえん」の様子を写したDVD「School's Out」の視聴、レポート作成を課題として出した。

7. おわりに

受講した学生からのコメントには、数多くの教育的意味への共感や発見が記されていた。「幼少期には遊びの意味など考えずにひたすら遊んでいたが、今振り返ってみるとさまざまな自分への影響があったと気づいた」等々の感想が記されており、また遊びの思い出を記した学生も多く、実感を伴う学びとなったようだ。ただし全体的に、「将来の知識獲得のために自然の中での遊びが必要なのだと感じた」といったように、遊びが持つ本来の無目的性やダイナミズムよりも、将来の勉強にとって有用であることに目が行きがちであった。無論、学問として自然を科学的に解明して行くことは重要であるが、幼少期の自然体験があつてこそ、宇宙的な広がりの中で生きものとして人間の在りようを再考し、持つべき責任やその自覚につながることへの気づきや発見をしてほしかった。加えて大人が子どもの興味・関心に耳を傾け、自由に思うままに、そして大人も子どもと一緒に自然の中で遊ぶことの大切さを実感してほしい。というのも、学生たちが未来を担い、さらには将来子どもを育てる側になった時の土台になると考えるからだ。そのために子どもと自然の関わりについて人間形成の立場からどのような講義を展開できるか、今後の課題としたい。

〈参考文献〉

- (1) E.Hoffman (hg.), *Friedrich Fröbel Ausgewählte Schriften, Bd.2. Die Menschengenerziehung*. (Stuttgart 1982.) (フレーベル著、荒井武訳『人間の教育』(上下)、岩波文庫、1964年)
- (2) W. Lange (hg.), *Friedrich Fröbels gesammelte pädagogische Schriften, Abt.2.* (Berlin : Faksimiliedruck Osnabrück 1966.) (小原國芳・莊司雅子監修『フレーベル全集 第三巻』玉川大学出版部、1977年)
- (3) *Mutter-und Koselieder, Dichtung und Bilder zur edlen Pflege des Kinderheitslebens. Ein Familienbuch von Friedrich Fröbel.* (Blankenburg 1844.) (フレーベル著、莊司雅子訳『母の歌と愛撫の歌』、キリスト教保育連盟、1976年)
- (4) レイチェル・カーソン著、上遠恵子訳『センス・オブ・ワンダー』新潮社、1996年
- (5) 今村光章編著『ようこそ！森のようちえんへー自然の中の子育てを語る』、解放出版社、2013年
- (6) イングリッド・ミクリッツ著『森の幼稚園ードイツに学ぶ森と自然が育む教育と実務の指南書』、風鳴舎、2018年
- (7) 岡部翠編著『幼児のための環境教育ースウェーデンからの贈りもの「森のムッレ教室」ー』、新評論、2007年
- (8) 能條歩著『人と自然をつなぐ教育ー自然体験教育学入門』NPO法人北海道自然体験活動サポートセンター、2015年

図1～6は、筆者が宝塚ならびにエディンバラで撮影したものである。



図1 植物を育てる

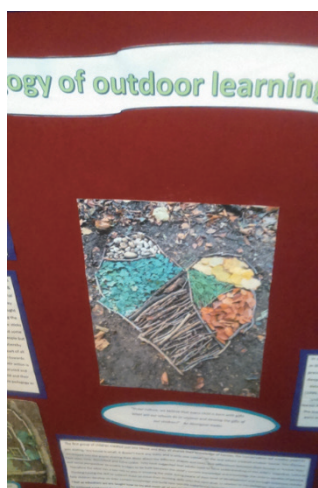


図2 花や葉、木の实を使っての製作



図3 秘密基地作り



図4 倒木をドラゴンに見立てて遊ぶ



図5 挑戦する勇気



図6 高いところから一望する



図7 ムッレ教室の発達段階ごとのプログラム
画像引用：<http://aurorakaori.blogspot.jp/2011/09/4.html>